

6 歯・口腔内の状況

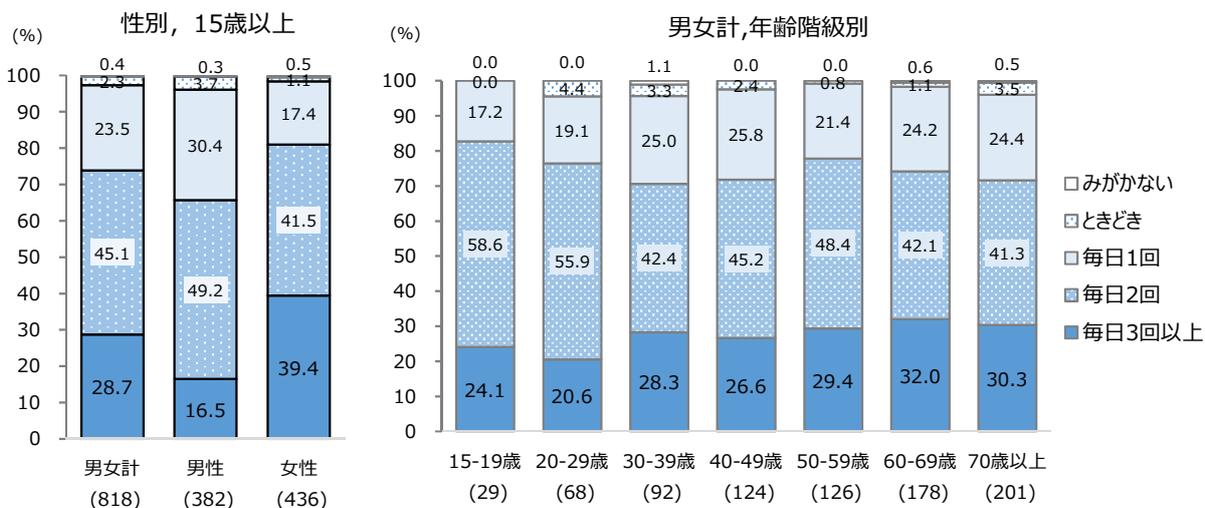
(1) 歯科に関する生活習慣の状況

① 歯みがきの頻度

15歳以上の毎日歯をみがく（毎日1回、毎日2回、毎日3回以上）の割合は、97.3%を占める。毎日2回みがく者の割合が最も多く45.1%、毎日3回以上の者の割合が28.7%、毎日1回の者の割合が23.5%であった。1日2回以上みがく者の割合が全体の73.8%を占めている。

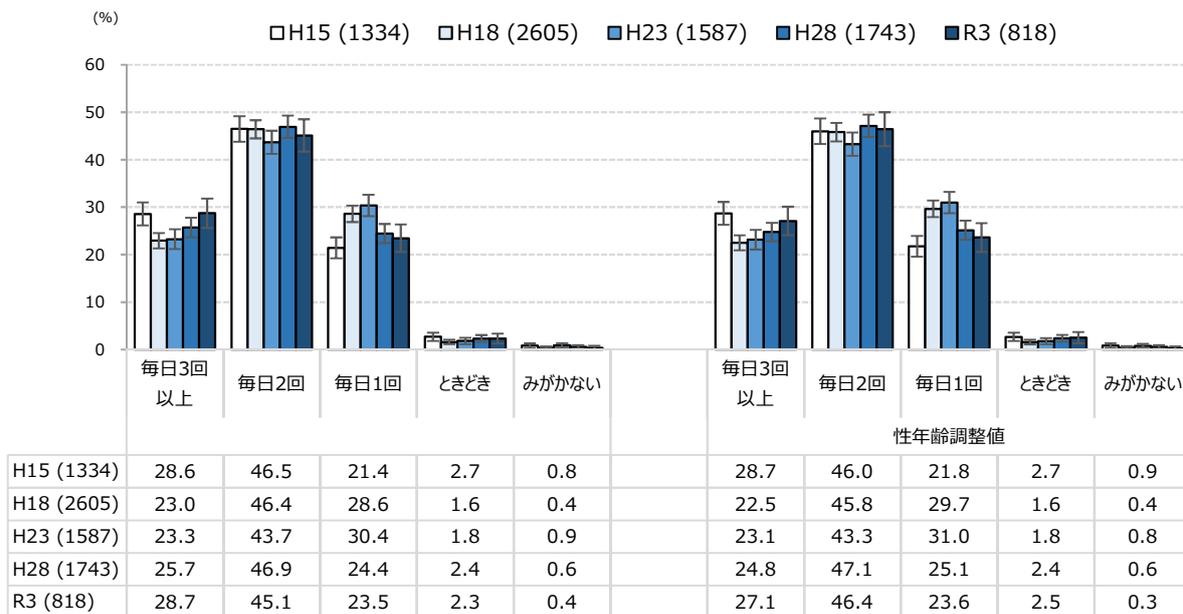
性別にみると、毎日歯をみがく者の割合は、男女ともに95%を超えている。頻度別にみると、毎日3回以上みがく者の割合が、男性16.5%、女性39.4%と女性のほうが高く、毎日1回みがく者の割合は、男性30.4%、女性17.4%と男性が高い。

図 歯みがきの頻度(性別・15歳以上, 男女計・年齢階級別)



平成15年以降の推移をみると、どの頻度も有意な増減はない。

図 歯みがきの頻度の年次推移(15歳以上・男女計) (平成15年, 18年, 23年, 28年, 令和3年)



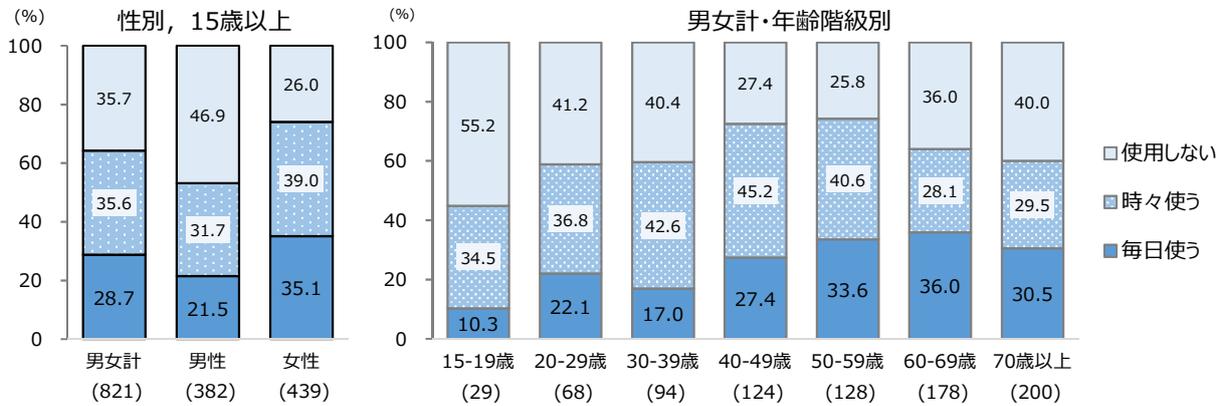
・性年齢調整値 (15歳以上) : 平成22年国勢調査男女計人口を基準に年齢調整した値。
 ・誤差線は±1.96×標準誤差で、標準誤差は調査人数から算出。

② 歯間ブラシやデンタルフロスの使用状況

歯間ブラシやデンタルフロスを毎日使用する者の割合は 28.7%、時々使用する者の割合は 35.6%である。使用しない者の割合が 35.7%であり、最も多い。年齢階級別では、毎日使用する者の割合は、年代が上がるにつれて増加する傾向にある。

性別にみると、毎日使用する者の割合は男性で 21.5%、女性で 35.1%と女性のほうが高い。

図 歯間ブラシ・デンタルフロスの使用頻度(性別・15 歳以上, 男女計・年齢階級別)



平成 15 年以降の推移をみると、性年齢調整値で「毎日使う」と「時々使う」は有意に増加、「使用しない」者の割合は、有意に減少した。

年齢階級別の歯間ブラシ・デンタルフロスを毎日使用する者の割合は、15~19 歳、60 歳代、70 歳以上で有意に増加した。

図 歯間ブラシ・デンタルフロスの使用頻度の年次推移(15 歳以上・男女計)(平成 15 年,18 年,23 年,28 年,令和 3 年)

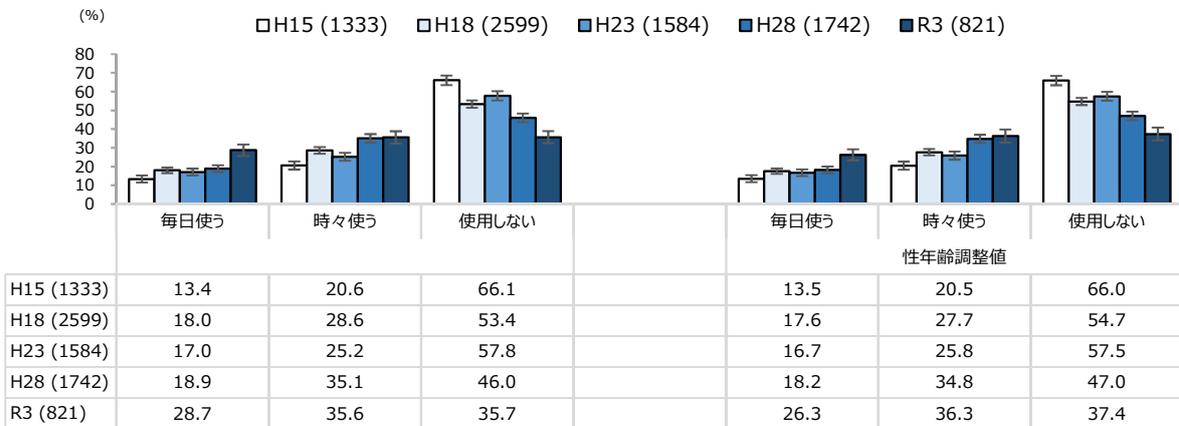
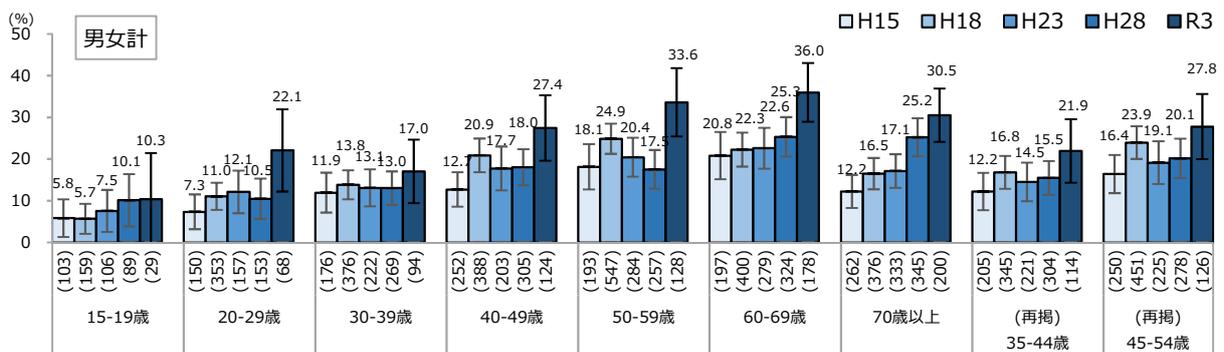


図 歯間ブラシ・デンタルフロスを毎日使用する者の割合の年次推移(年齢階級別・男女計)(平成 15 年, 18 年,23 年,28 年,令和 3 年)



性年齢調整値 (15 歳以上) : 平成 22 年国勢調査男女計人口を基準に年齢調整した値。誤差線は±1.96×標準誤差で、標準誤差は調査人数から算出。

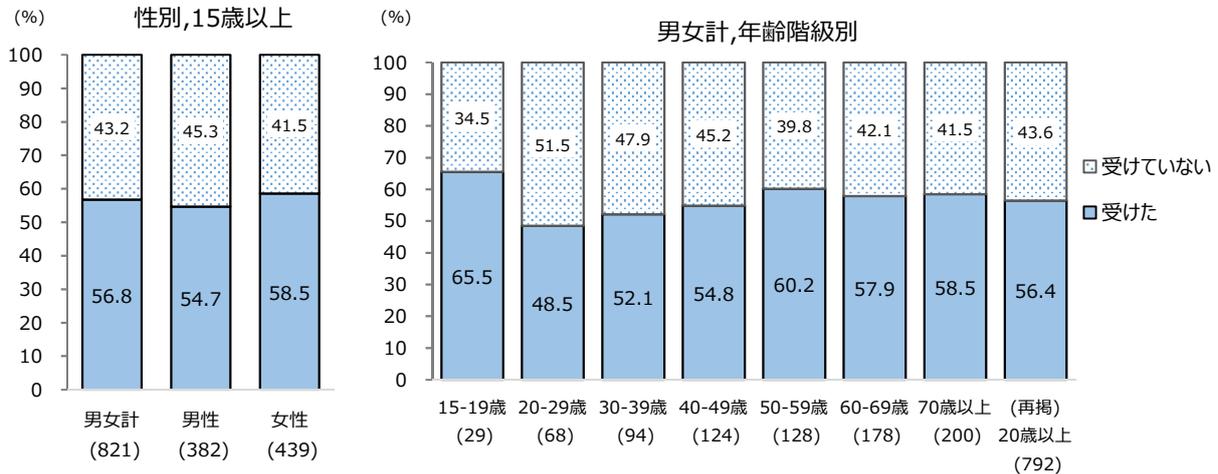
参考「健康おきなわ 21 (第 2 次)」の目標 : 歯間部清掃器具を毎日使用する人の割合の増加
目標値 : 40 歳(35-44 歳) 50%, 50 歳(45-54 歳) 50%

③ 歯科検診の受診状況

過去1年間に歯科検診を受診した者の割合は56.8%である。年齢階級別にみると、15～19歳が65.5%で最も高い。20歳～50歳代にかけてその割合は増加し、50歳代以上の約6割が歯科検診を受診している。

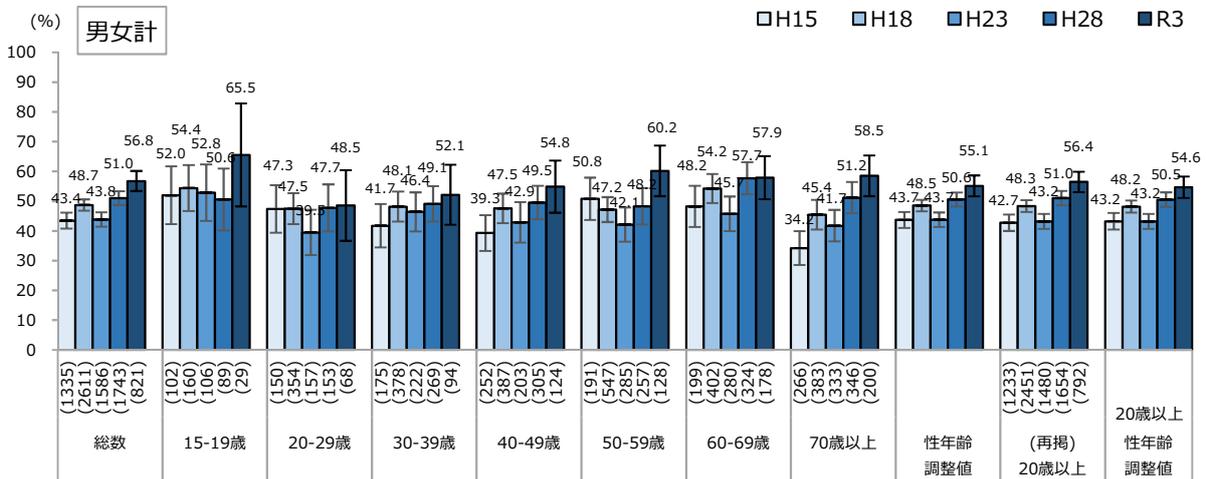
性別では、歯科検診を受診した者の割合は、男性54.7%、女性58.5%である。

図 歯科検診の受診状況(性別・15歳以上, 男女計・年齢階級別)



平成15年以降の推移をみると、70歳以上で有意に増加している。

図 歯科検診を受診した者*の割合の年次推移(15歳以上・男女計)(平成15年, 18年, 23年, 28年, 令和3年)



*「歯科検診を受診した者」とは、「この1年間に歯科検診を受けましたか」に「はい」と回答した者。
ただし、平成28年は「あなたはこの1年間に歯の健康づくりのために歯科健康診査や専門家による口腔ケア(歯面の清掃、歯石の除去、入れ歯の調整など)をどのくらいの頻度で受けましたか」に「半年に1回以上」または「1年に1回程度」と回答したもの

- ・性年齢調整値(15歳以上)：平成22年国勢調査男女計人口を基準に年齢調整した値。
- ・誤差線は±1.96×標準誤差で、標準誤差は調査人数から算出。

参考「健康おきなわ21(第2次)」の目標
過去1年間に歯科健診(検診)を受診した者の割合の増加
目標値：20歳以上 60%

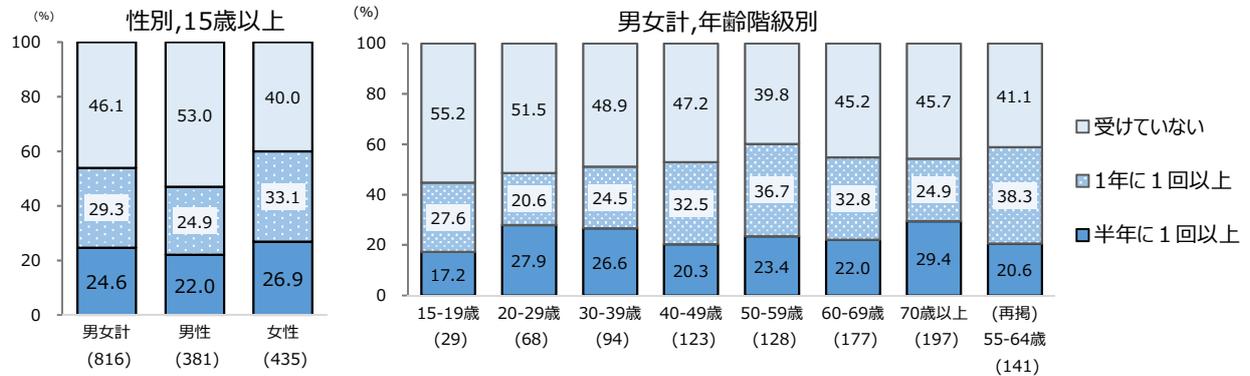
④ 歯科医院での定期ケア受診の状況

過去1年間の専門家による歯面の清掃や歯石除去などの口腔ケアの受診状況は、半年に1回以上受けた者の割合が24.6%、年に1回以上が29.3%、受けていない者の割合が46.1%であり、受けていない者が約半数であった。

定期的な歯石除去や歯面清掃を受ける者*の割合は、50歳代が60.2%で最も高い。

*「定期的な歯石除去や歯面清掃を受ける者」とは、「半年に1回以上」または「1年に1回程度」と回答した者

図 専門家による口腔ケア受診状況(15歳以上・男女計)

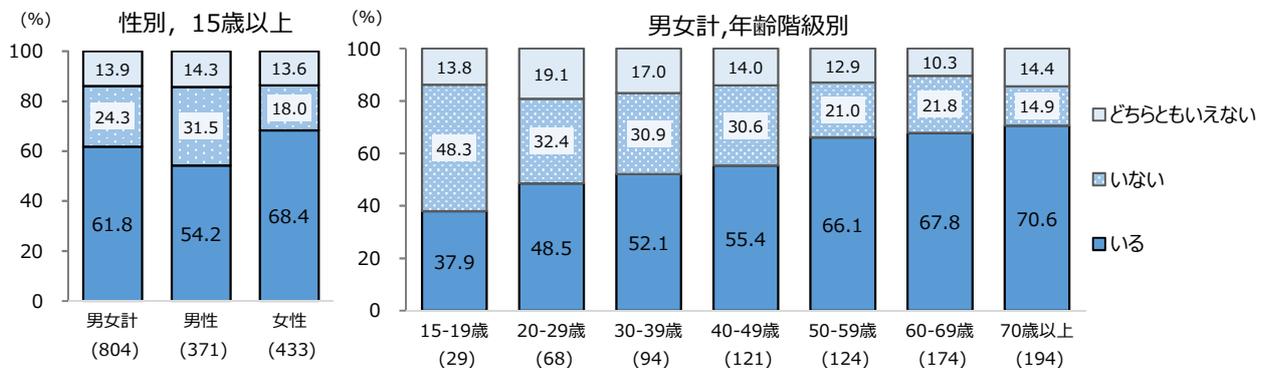


参考「健康おきなわ 21 (第2次)」の目標：歯科医院で定期的な歯石除去や歯面清掃を受ける者の割合の増加
目標値：60歳(55~64歳) 65%

⑤ かかりつけ歯科医の有無

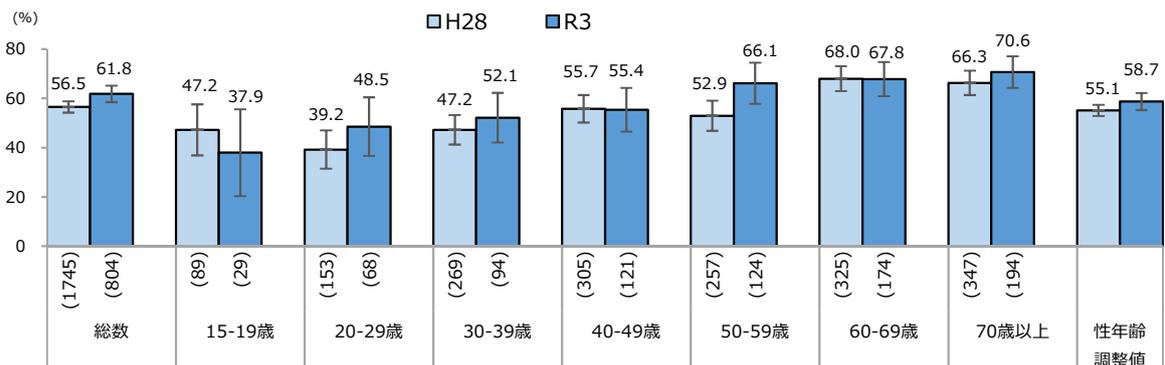
かかりつけ歯科医がいる者の割合は61.8%、いない者の割合は24.3%であった。年齢階級別にみると、かかりつけ歯科医がいる者の割合は、年代があがるにつれて増加し、70歳以上で70.6%である。性別にみると、かかりつけ歯科医がいる者の割合は、男性54.2%、女性68.4%で女性のほうが高い。

図 かかりつけ歯科医の有無(性別・15歳以上, 男女計・年齢階級別)



平成28年と比較して、かかりつけ歯科医がいる者の割合は50歳代で有意に増加した。

図 かかりつけ歯科医のいる者の割合(15歳以上・男女計)(平成28年, 令和3年)

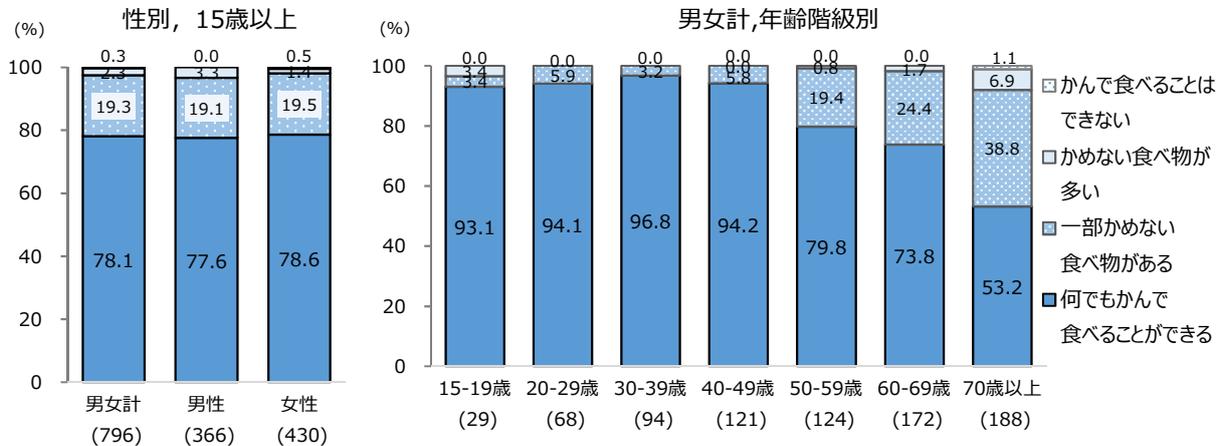


性年齢調整値 (15歳以上)：平成22年国勢調査男女計人口を基準に年齢調整した値。誤差線は±1.96×標準誤差で、標準誤差は調査人数から算出。

⑥ かんで食べるときの状態

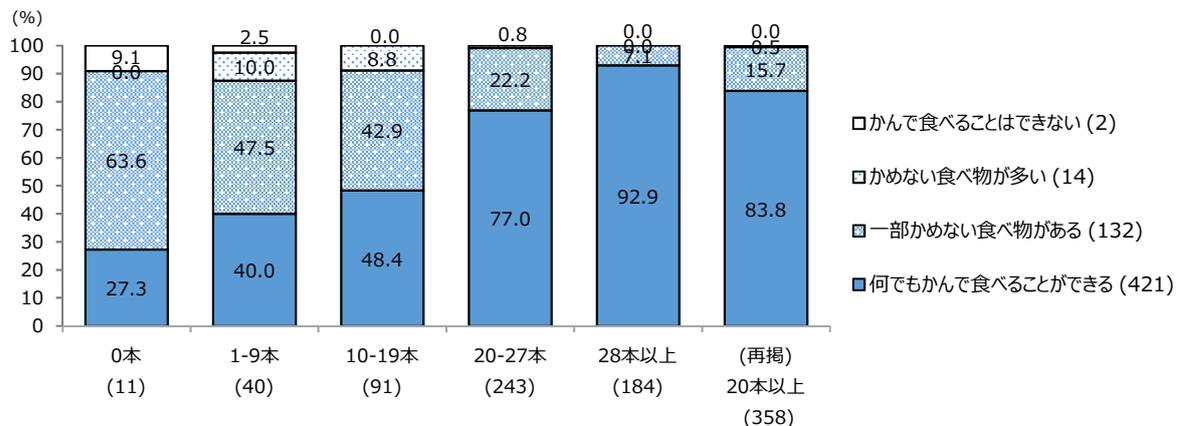
かんで食べるときの状態について、「何でもかんで食べることができる」者の割合は、78.1%であり、50歳代から減少する。

図 かんで食べるときの状態(性別・15歳以上, 男女計・年齢階級別)



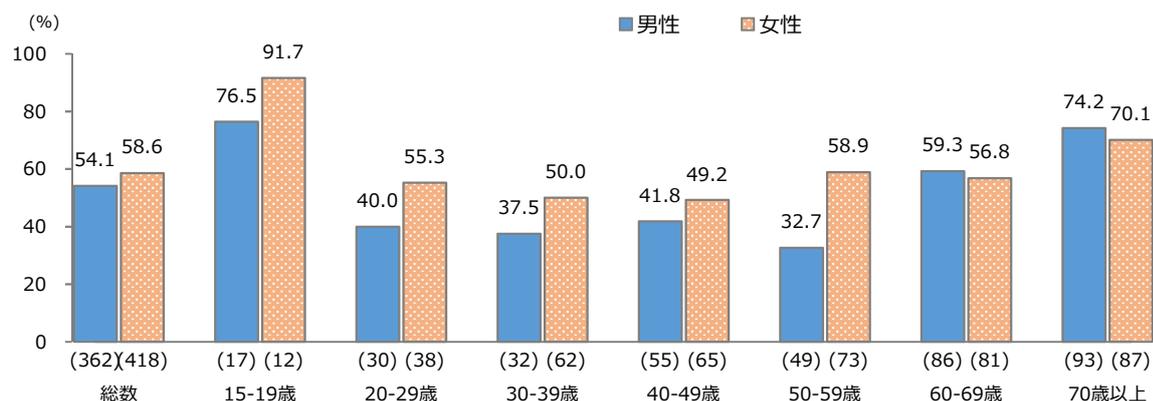
かんで食べるときの状態と歯の保有状況について、20本以上歯を有する者の「何でもかんで食べることができる」者の割合は83.8%である。歯の本数が少ないほど、その割合は減少し、20本未満では5割を下回っている。

図 かんで食べるときの状態と歯の保有状況(40歳以上, 男女計)



ゆっくりよくかんで食事をする者の割合は、男性 54.1%、女性 58.6%である。男女ともに15~19歳、70歳以上で最も高く、20~50歳代の男性で低い。

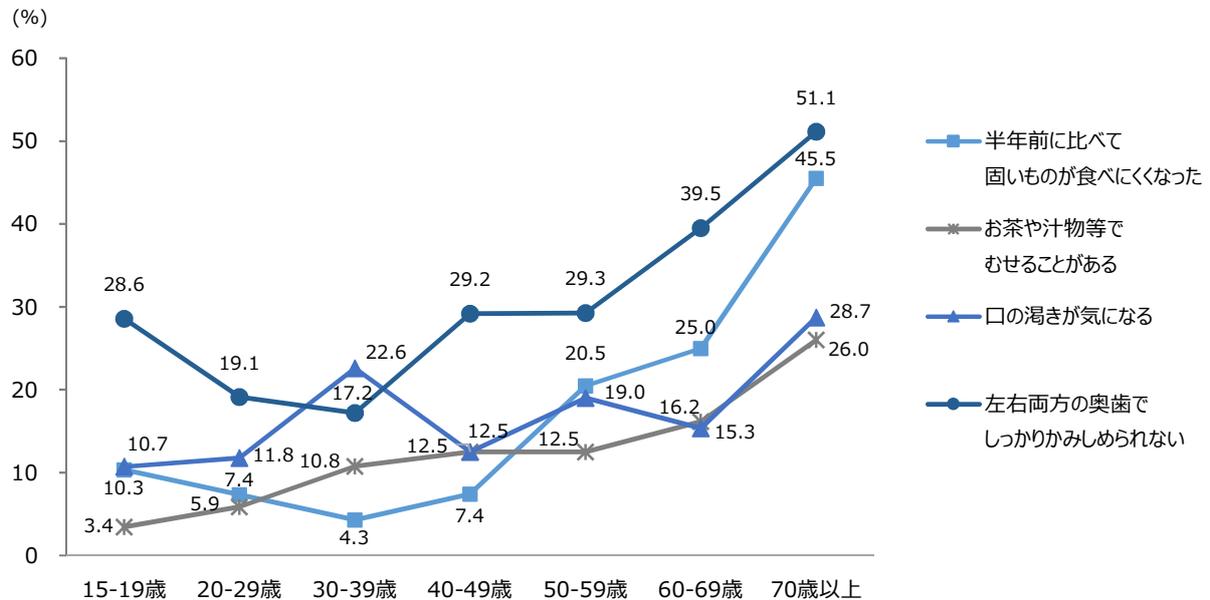
図 ゆっくりよくかんで食事をする者の割合(15歳以上, 性年齢階級別)



⑦ 食べ方や食事の様子

食事の様子について、「左右両方の奥歯でしっかりかみしめられない」者の割合は、40歳～50歳代で約3割、60歳代で39.5%、70歳代以上で51.1%であり、60歳代以上で約4割を超えている。「半年前に比べて固いものが食べにくくなった」「口の渇きが気になる」「お茶や汁物等でむせることがある」者の割合は70歳以上で最も高く、それぞれ45.5%、28.7%、26.0%である。

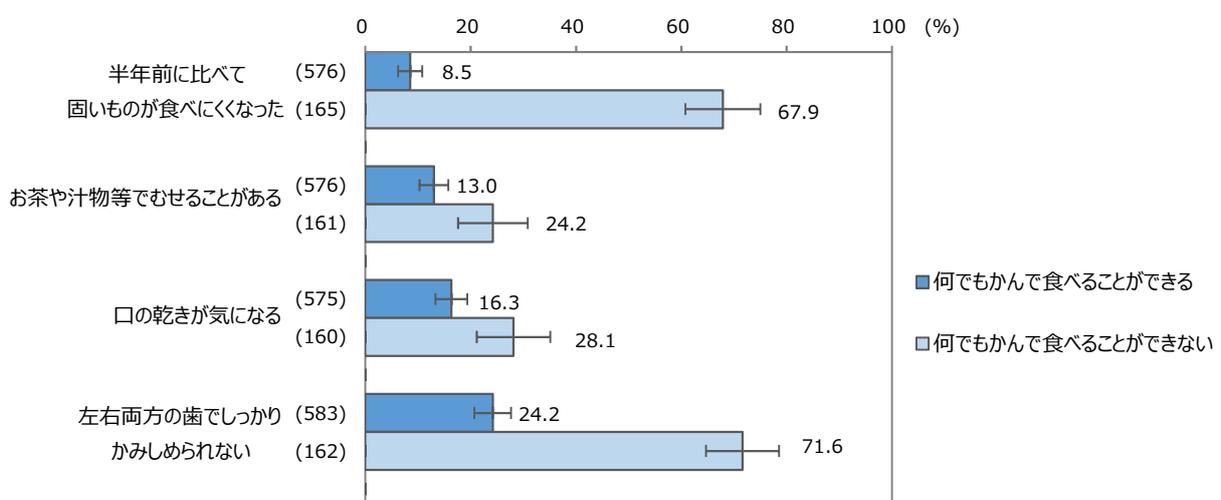
図 食事の様子(15歳以上, 男女計・年齢階級別)



・図中の数値は、「半年前に比べて固いものが食べにくくなった」「お茶や汁物等でむせることがある」「口の渇きが気になる」に「はい」と回答した者、「左右両方の奥歯でしっかりかみしめられる」に「いいえ」と回答した者の割合。各項目で無回答の者を除外した。

食事の様子について、かんで食べる時の状態別にみると、何でもかんで食べることができない*者がすべての項目でその割合が有意に高く、「左右両方の歯でしっかりかみしめられない」が71.6%、「半年前に比べて固いものが食べにくくなった」が67.9%である。

図 かんで食べる時の状態別 食事の様子 (20歳以上, 男女計)



*「何でもかんで食べることができない」とは、「一部かめない食べ物がある」「かめない食べ物が多い」または「かんで食べることはできない」のいずれかに回答した者。各項目で無回答の者を除外したため、解析対象者は異なる。

誤差線は $\pm 1.96 \times$ 標準誤差で、標準誤差は調査人数から算出。

(2) 口腔内状況

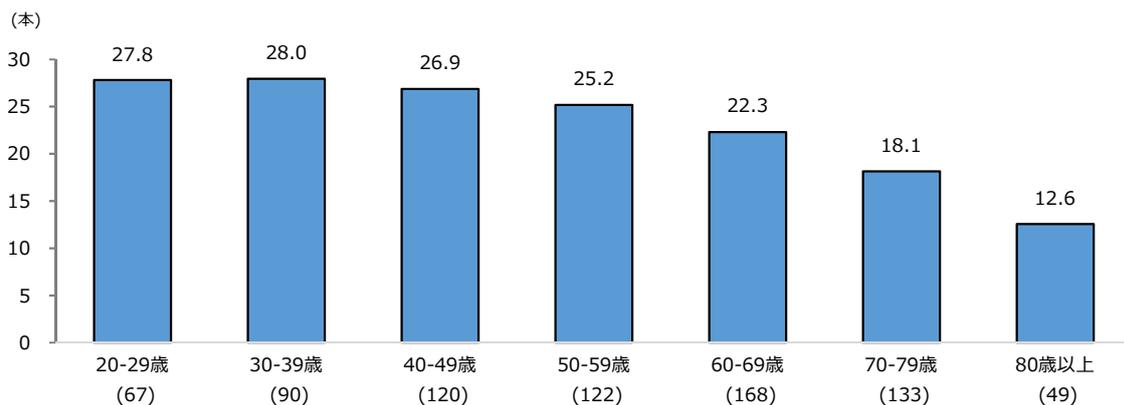
① 一人平均現在歯数

一人平均現在歯数*は、20歳代は27.8本、30歳代は28.0本、40歳代は26.9本、50歳代は25.2本、60歳代は22.3本、70歳代は18.1本、80歳以上は12.6本で、年代が上がるとともに減少している。

80歳で20本以上自分の歯を有することを旨とする「8020運動」が展開されているが、70歳代以上で20本を下回った。

*「一人平均現在歯」とは、「自分の歯は何本ありますか」に回答した者の「歯の本数」の合計÷被調査者数

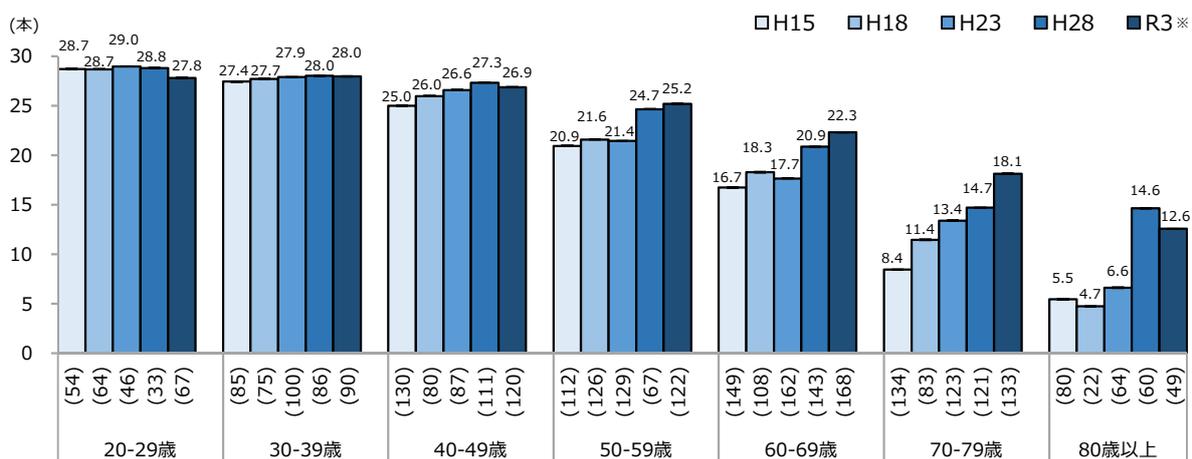
図 一人平均現在歯数(20歳以上, 男女計・年齢階級別)



平成15年からの推移をみると、30歳代、50歳代、60歳代、70歳代で有意に増加している。

※歯の本数については、平成28年以前と令和3年とでは調査方法が異なる。

参考図※ 一人平均現在歯数の年次推移(20歳以上・男女計)(平成15年,18年,23年,28年,令和3年)



※令和3年の歯の本数は質問紙による自己申告(「自分の歯は何本ありますか」)による。平成28年までは歯科医師による口腔診査による現在歯数(健全歯、未処置歯、処置歯の総数)であり、調査方法が異なる。質問紙と口腔診査による現在歯数については、自己評価による現在歯数の平均値と実際の現在歯数の平均値の差は年齢階級別にみても小さく、個人単位での一致度についての相関は高かったことから、集団レベルの現在歯数は、口腔診査を行わなくても質問紙による自己評価法によって十分正確に把握できる¹⁾という研究がある。

・参考文献 1) 安藤雄一, ほか. 質問紙法による現在歯数調査の信頼性. 口腔衛生学会雑誌. 47:657-662,1997

② 20 本以上自分の歯を有する者の割合

自分の歯を 20 本以上有する者の割合は、年代があがるとともに減少し、40 歳代で 94.2%、50 歳代で 90.2%、60 歳代で 78.6%、70 歳代で 55.6%、80 歳以上で 26.5%である。

図 20 本以上自分の歯を有する者の割合
(20 歳以上, 男女計・年齢階級別)

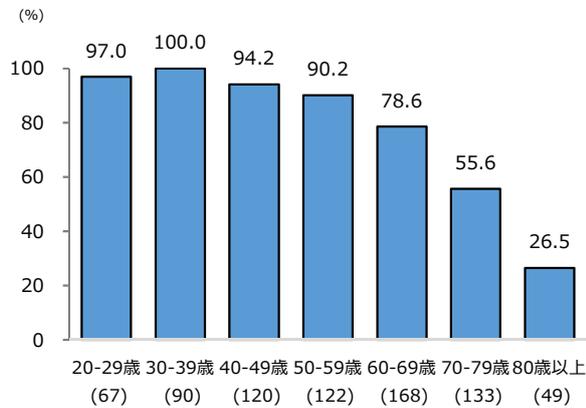
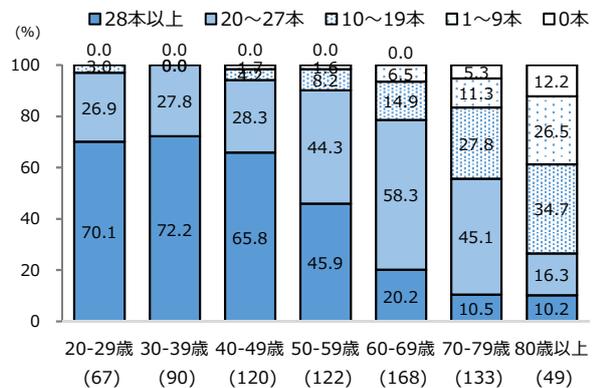


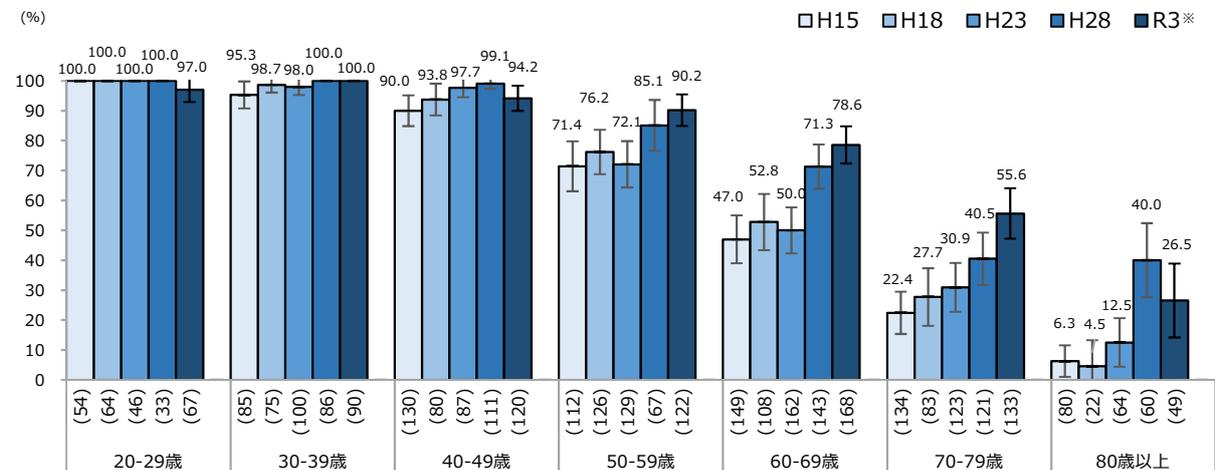
図 歯の本数の分布
(20 歳以上, 男女計・年齢階級別)



平成 15 年からの推移をみると、50 歳代、60 歳代、70 歳代で有意に増加している。

*歯の本数については、平成 28 年以前と令和 3 年とでは調査方法が異なる。

参考図※ 20 本以上自分の歯を有する者の年次推移(20 歳以上・男女計)(平成 15 年,18 年,23 年,28 年,令和 3 年)



※令和 3 年の歯の本数は質問紙による自己申告(「自分の歯は何本ありますか」)による。平成 28 年までは歯科医師による口腔診査による現在歯数(健全歯、未処置歯、処置歯の総数)であり、調査方法が異なる。質問紙と口腔診査による現在歯数については、自己評価による現在歯数の平均値と実際の現在歯数の平均値の差は年齢階級別にみても小さく、個人単位での一致度についての相関は高かったことから、集団レベルの現在歯数は、口腔診査を行わなくても質問紙による自己評価法によって十分正確に把握できる¹⁾という研究がある。

・参考文献 1) 安藤雄一,ほか. 質問紙法による現在歯数調査の信頼性. 口腔衛生学会雑誌. 47:657-662,1997

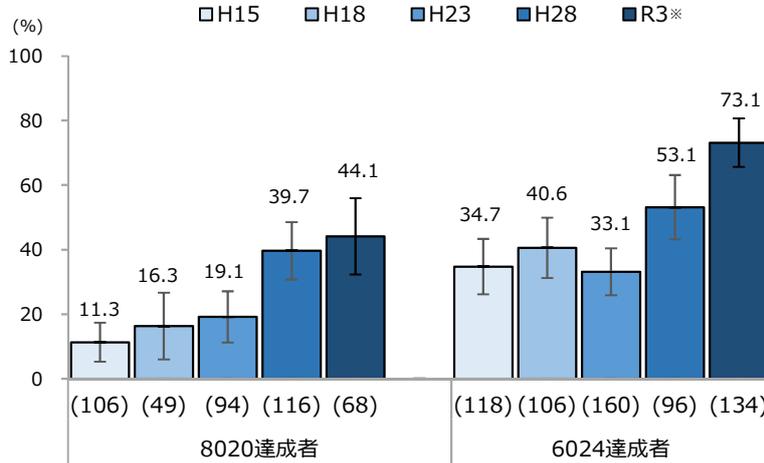
③ 8020・6024の達成者の割合

8020 達成者を 75～84 歳で 20 本以上自分の歯を有する者の割合と定義すると、8020 達成者は 44.1%であった。

6024 達成者を 55～64 歳で 24 本以上自分の歯を有する者の割合と定義すると、6024 達成者の割合は、73.1%であった。

※歯の本数については、平成 28 年以前と令和 3 年とでは調査方法が異なる。

参考図※ 8020・6024の達成者の割合の年次推移（男女計）(平成 15 年,18 年,23 年,28 年,令和 3 年)



※令和 3 年の歯の本数は質問紙による自己申告(「自分の歯は何本ありますか」)による。平成 28 年までは歯科医師による口腔診査による現在歯数(健全歯、未処置歯、処置歯の総数)であり、調査方法が異なる。質問紙と口腔診査による現在歯数については、自己評価による現在歯数の平均値と実際の現在歯数の平均値の差は年齢階級別にみても小さく、個人単位での一致度についての相関は高かったことから、集団レベルの現在歯数は、口腔診査を行わなくても質問紙による自己評価法によって十分正確に把握できる¹⁾という研究がある。

・参考文献 1) 安藤雄一,ほか, 質問紙法による現在歯数調査の信頼性. 口腔衛生学会雑誌. 47:657-662,1997

参考「健康おきなわ 21 (第 2 次)」の目標

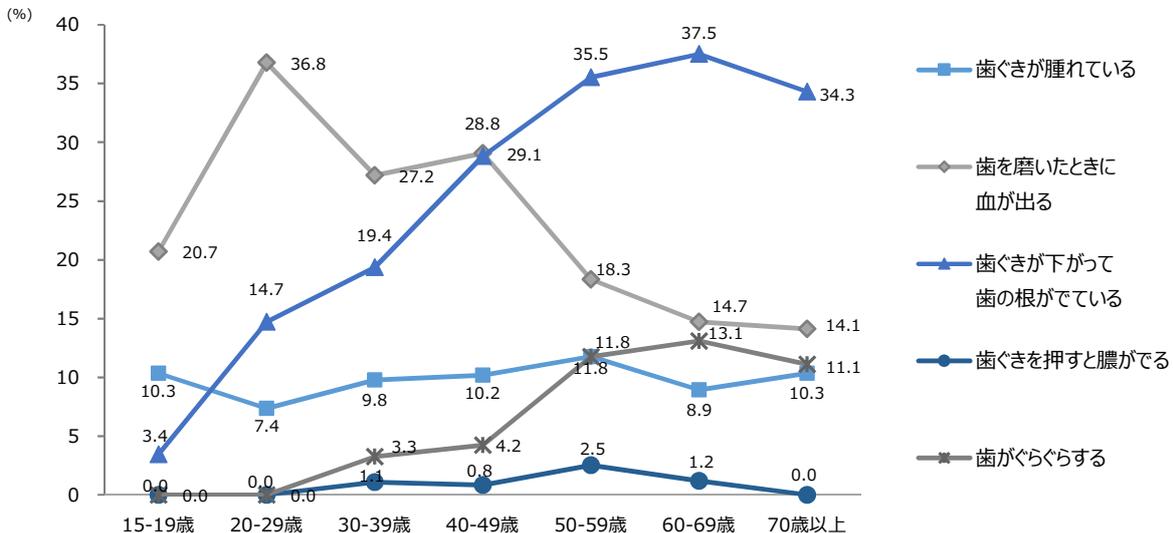
80 歳で 20 歯以上の歯を有する者の割合の増加, 目標値: 80 歳(75～84 歳) 50%

60 歳で 24 歯以上の歯を有する者の割合の増加, 目標値: 60 歳(55～64 歳) 60%

④ 歯ぐきの状態

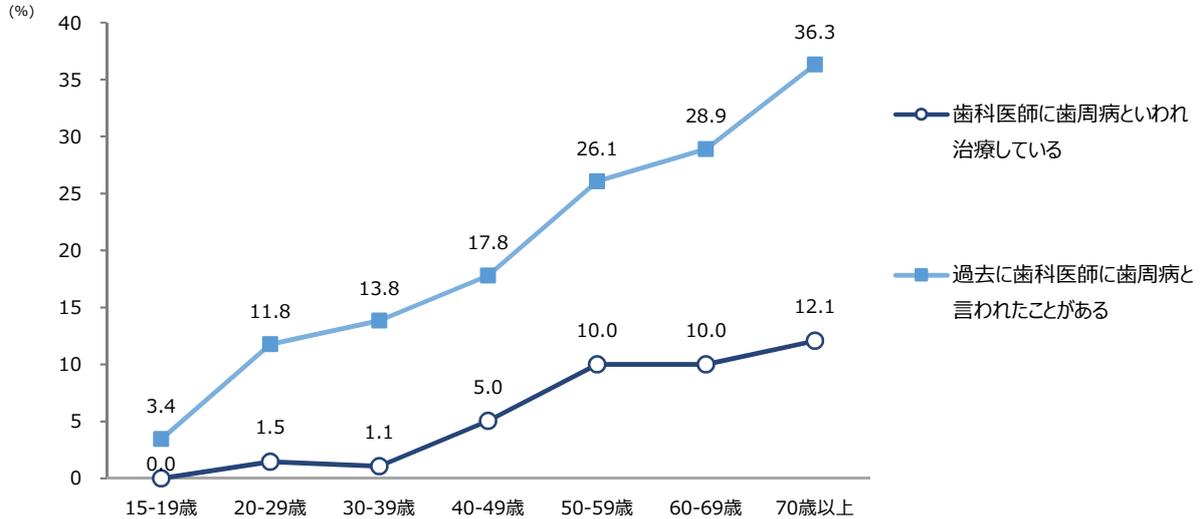
歯ぐきの状態について、「歯ぐきが下がって歯の根がでている」者の割合は、年代があがるにつれて増加し、50 歳代以上で約 3 割～4 割である。「歯を磨いたときに血が出る」者の割合は、20 歳代で 36.8%と最も高く、年代があがるにつれて減少する。「歯がぐらぐらする」者の割合は、50 歳代で増加し、50 歳代以降で約 1 割を占める。「歯ぐきが腫れている」者の割合は、どの年代も約 1 割で推移している。

図 歯ぐきの状態 (15 歳以上, 男女計・年齢階級別)



歯周病について、「歯科医師に歯周病と言われ治療している」「過去に歯科医師に歯周病と言われたことがある」者の割合は、年代があがるにつれて高くなり、70歳以上では、それぞれ12.1%、36.3%であった。50歳代以上の約1割が治療中であり、約3割が過去に歯周病と言われたことがある。

図 歯周病の治療状態（15歳以上，男女計・年齢階級別）

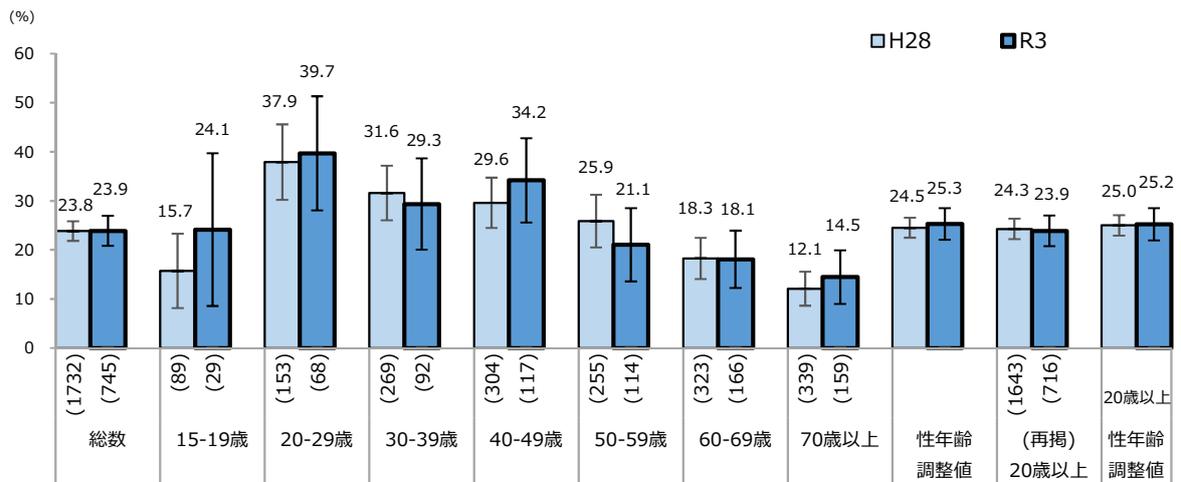


⑤ 歯肉に炎症を有する者の割合

歯肉に炎症を有する者*の割合は23.9%であり、平成28年と比較して有意な差はない。年齢階級別にみると、20歳代で最も高く、約4割である。

*「歯肉に炎症を有する者」とは、「歯ぐきの状態」において、「歯ぐきが腫れている」、「歯を磨いた時に血が出る」のいずれかに「はい」と回答した者。

図 歯肉に炎症を有する者の割合（15歳以上，男女計・年齢階級別）（平成28年，令和3年）



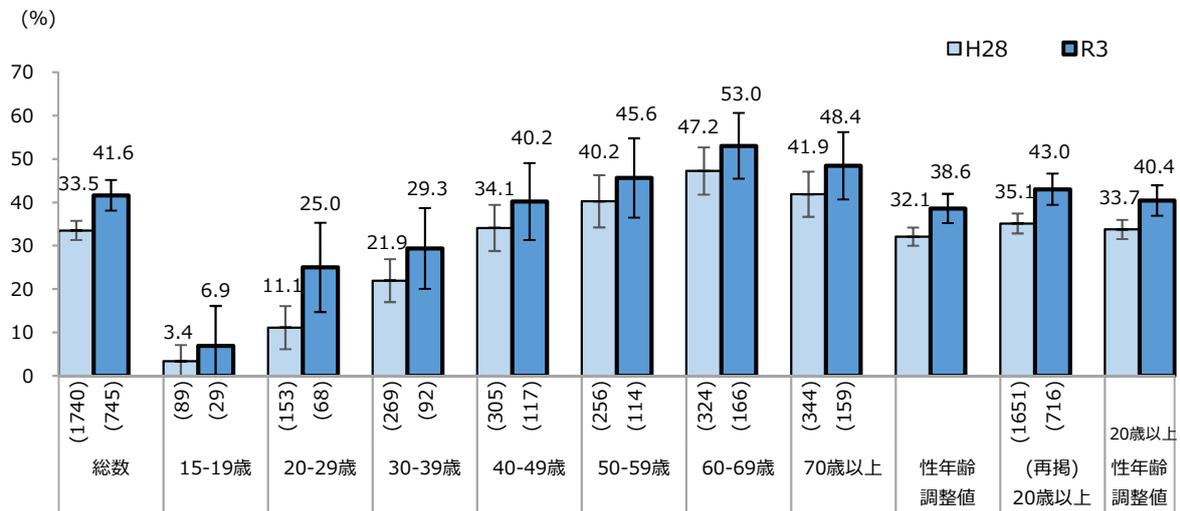
性年齢調整値（15歳以上，20歳以上）は、平成22年国勢調査男女計人口を基準に年齢調整した値。誤差線は $\pm 1.96 \times$ 標準誤差で、標準誤差は調査人数から算出。

⑥ 進行した歯周炎を有する者の割合

進行した歯周炎を有する者*の割合は41.6%であり、平成28年と比較して有意に増加した。年齢階級別にみると、年齢があがるにつれて増加し、60歳代で最も高く、約5割である。

*「進行した歯周炎を有する者」とは、「歯ぐきの状態」において、「歯ぐきが下がって歯の根が出ている」、「歯ぐきを押しと膿がでる」、「歯がぐらぐらする」、「歯科医師に歯周病(歯そこのうろう)と言われ、治療している」、「過去に歯科医師に歯周病(歯そこのうろう)と言われたことがある」のいずれかに「はい」と回答した者。

図 進行した歯周炎を有する者の割合（15歳以上、男女計・年齢階級別）（平成28年、令和3年）



性年齢調整値（15歳以上、20歳以上）は平成22年国勢調査男女計人口を基準に年齢調整した値。誤差線は±1.96×標準誤差で、標準誤差は調査人数から算出。

参考「健康おきなわ21（第2次）」の目標

歯肉に炎症所見を有する者の割合*の減少

目標値：40歳代 25%、50歳代 30%、60歳代 35%

*健康おきなわ21（第2次）の目標「歯肉に炎症所見を有する者の割合」とは、「進行した歯周炎を有する者の割合」となっている。